



YAMAGUCHI UNIVERSITY

1983



鴻文会会報

第 2 号 | 発行・鴻文会 753 山口市吉田1677-1 山口大学人文学部内 電話(0839)22-6111 (内線) 808 郵便振替口座 下関0-15902

御 挨拶

鴻文会名誉会長 渡 辺 眞 治



鴻文会名誉会長という大変晴れがましい肩書を頂いて恐縮しております。私は昭和二十六年十月、教育学部から配置換えで文学部文学科の西洋史担当の教官となり、五十三年六月、文学部文学科が人文学部に発展的解消を遂げた時、初代人文学部長に選出されて今日に至っております。

人文学部は発足後、学年進行計画に従って新しい学科目が増えまして、文学部文学科の頃と比べますと、日本思想史学、美学・美術史、考古学、社会心理学、社会人類学、フランス語学・フランス文学、言語学などの新しい学科目が増設され、教官数も四三名となっております。この中には鴻文会会長である英米文学の和田教授を始め、国史学の八木教授、ドイツ語学・ドイツ文学の岡光助教授、国語学の添田助教授、社会人類学の佐々木講師、中国語学の丸尾助手と六名の会員が含まれており、今後も会員の教官が増加することを期待しております。

校舎の方は山口市吉田地区に六階建の新校舎が昭和五十四年十一月に完成し、文学部文学科時代の糸米から後河原、後河原から吉田地区へ、今回、吉田地区内の独立棟へと戦後の日本の発展ぶりを象徴するかのようになり、移転の度に施設面では良くなっております。中身の方も会員諸氏に劣らないような卒業生に仕上げて鴻文会の仲間入りに恥じないような人文学部の学生を送り出すように教官各位と共に努力しております。

文学部文学科時代以来今日まで主として関ヶ原以西出身の学生諸君と接して、卒業、就職とその状況を見て来ましたが、文学部文学科出身の鴻文会会員の方々が各界で活躍しておられるのを受けて、人文学部の第一回の卒業生も各界に広く受け入れられました。学生数は、現在、一学年一八〇名となっておりますが、会員諸氏の頃と比べて、学生の質もほとんど低下することなく、順調に教育することができ、喜んでおります。今後、会員諸氏の後輩に当る人文学部の卒業生がどんな世の中に出て行きます。私と致しましては、これらの新会員が先輩会員諸氏のえられた社会的評価とその衣鉢を受け継いで、順調に育って行くことを心から願っておりますので、会員諸氏も後輩連中を暖かく迎えて、御指導を賜るようお願いする次第であります。

(人文学部長)

私の中の山大・山口

私と山大

副会長 滝本龍也
(社会学・文理第三回卒業)

私は終戦後間もなく旧制中学校を卒業して実務に就いたが、身すぎ世すぎの毎日が何とも味気なく、又終戦前後のドサクサの学校教育で失われていたものを取り返そうとの気持ちもあって、昭和二十六年ふるさとの山大理学部へ入学した。当時ふるさとを出て他の大学へ入りたいと思いは強かったが、にわか仕込みの勉強では間に合わず経済的にも他郷へ出ることは許されなかった。

そうした私にとって山大理学部は結果としては真に貴重な魂の揺籠期であったと思う。

その四年間に、特に知的飢え乾きがいやされたわけでもない。学問に燃焼したわけでもない。再び世に処して行くに充分な知識技能を身につけたわけでは勿論ない。熱烈な恋愛をしたわけでもない。

当時の文理学部は市内米本の旧制山口高校の校舎をそのまま使用していたことに象徴されるように旧制高校の超俗的思弁の雰囲気色が濃く残っており、二、三年上級生には旧制山高の残留組の方々にもおられたし旧制高校から引き続きの先生方が多かった。そうした雰囲気の中で「人は何処から

来て何処へ行くのか。人生如何に生きべきか」の内省の機会を与えられたのが最大の収穫であった。

山紫水明のふるさととは人間の罪や死の問題を思うのに恰好の天地であった。

山大Y.M.C.A.に入って神に祈る人々の姿に触れる機会を持つことが出来た。教養課程では教壇をゆつくり行き帰りしながら「柳は緑、花は紅」の自然哲学を説かれる田中晃先生の講義を聴くことができた。ジャバニーズイングリッシュではあるが噛んで含めるような英語の岡崎先生の「クリスマス・キャロル」の講読も忘れることは出来ない。

専攻課程(社会学)に入ってからには主任教授の潮見先生のお宅や先生の所謂第二研究室(喫茶店)に足繁く出入りし学問以外の人の生き方を学ぶことが出来た。こうした体験が今日の私の価値観人生観の基を作っていることを痛感するこの頃である。(山口家庭裁判所主任調査官)



昭和24年頃の坂川の橋(伊勢橋・五重の塔を望む)

私とやまぐち

和田修治
(東洋史学・文理第五回卒業)

父も母も山口の生れで、子供の頃から山口の町には馴染みがあった。山口線で山口の家並みが近づくとなんとなく心が浮いた。暮参りがすんで父とよく寄ったトコロテン屋はどの辺りだったのだろうかと、町はずれの家々を今も探してみる事がある。山口は私にとっていわば心のふるさとなのかも知れない。

しかし、一方ではそんな気持ちとは裏腹に大学はどこか遠くに行きたい気持ちがあった。それも長い並木道のある……

ところが父の退職によって止むを得ず家から通うという条件で私は山大理学部へ入学した。その頃の山大はタコノ足よろしく各学部は分散し、我々文科の学生も教養は経済学部(現美術館)で、専門は現山口高(旧制山高敷地)で半年、その後卒業まで現教育庁等庁舎の一角で受けた。このように当時の山大は施設面では恵まれず我々学生も落ちつかず、凡そ大学という雰囲気は感じられず、私自身も大学へ入学したという気分にはたれなかった。でも新生山大理の気は高く、学長の松山基範学部長の青木正児の両先生など日本でも有数の学者をいただき、上村、石黒、益田、川副各教授、なかでもわが恩師新進気鋭の小畑龍雄先生など多くの師がありしたしく教養を受け、お宅にもよくお邪魔した。学生達もよく勉強した。私自身もよく勉強した。昼は先輩や同級生と研究室でダベリつつ、辞書をひもとき、夜

は明け方近くまで頑張った。勉強に没入したことよってようやく私自身も方向を見出す事ができた。勉強はもちろん書物だけでなく、いわゆる社会学(飲・食・遊)にも大いに励んだ。青春時代という言葉は私達の為にあつたと思う程である。物質的に豊かではなかったが山口や山大はそんな私達を心豊かに育ててくれた。正直言つて山大の評価はそんなに高くはない。しかし、私自身の山大・山口には、いい師がいて、いい友達がいて、いいオバちゃんもいて、いい町があった。そうして今日の私を育ててくれた素晴らしい町と大学であり、私の訪れたイエールやソルボンヌなど問題ではないと思う程である。それが山口であり、山大である。(山口県教育庁文化課課長補佐)



昭和26年頃のあいわたせ橋(山方面より湯田方面を望む)



昭和40年代前半の文理学部校舎(経済学部より見る)

旧友との再会

久保田(芝田)千代子

(ドイツ文学・文理第十六回卒業)

十月下旬の京都は、紅葉もまだ葉末をほんのりと彩っているにすぎない。観光客の雑沓の中で二年ぶりに再会した旧友との話は尽きない。卒業以来十余年、山大で学んだ知識の大部分は歳月の中に風化してしまっただけで、四年間に培ってきた友情の絆だけは残っている。お互いに亭主一人、子供二人を持ち、凡俗の生活に埋れている。学生時代は細く、しなやかだった友の指も荒れ、風に乱れた髪には白髪が一筋。丸い瞳と豊かな頬、細やかな心づかいは昔のまま。

東山のふもとにある詩仙堂に足を運ぶ。石川丈山の庵室と伝えられるこの堂の庭は宮野の常栄寺の石庭を思わせるたまたまである。「もう山茶花が咲いちよるんやね」スキも石路の花もこの庭にあるものには不思議に趣深く見える。「山大はもう旧校舎の大部分は壊され、美術館や図書館に变身しちよるんよ。経済学部の前庭にあつたケヤキの大木や文理学部の庭にあつた楠の木だけは健在じゃけど」「ほんま…」友はもう優しい関西弁が身についている。「毎年五月頃になるとキャンパス一杯が楠の若葉の香に満ちていたような記憶があるけど」「それにしても私ら山大で何をしちよったんやろうね」「ほんま、勉強らしい勉強もせんとね。私、この頃子供等も手が離れたので何か仕事をしたと思うとるねんが、仲々良い仕事なのうて。一時期保険の勧誘

の様な事をしよつたけど、どうしても性に合わず辞め、今は参考書のセールスみたいな事をしよるねん」あなたは教員免許を持っていてのに、そんな仕事では勿体ないと心の中でつぶやく。「仕事のえり好みなんか言つてられへんの。私も最初は悩んだけれど」そう、無気力で怠惰な学生生活を過ごしてきた私のような者にとつても、文学という代物、文学士という称号など実生活では何の役にも立つてはいない。

「色々な生き方があるけれども、現在の生活に意義を見出して、自分なりに生きてみるしかないよ」こういう友からはその昔の文学少女の面影が薄れて、たくましい生活人の片鱗がちらと覗く。新幹線の窓から見えなくなるまで手を振って友は別れを惜しんでくれる。「Kさん、お互いに頑張ろうね。人生という大学はたやすくは卒業させてくれそうもないから」この友との交流を人生大学卒業の時まで、一の坂川の清冽な流れのように絶えぬものにしてゆきたいと思う私を乗せて、汽車は一路西へ向う。

(山口県柳井教育事務所総務課)



元文理学部校舎(後河原)の現在

卒業して八カ月

磯野 憲 治

(中国語学中国文学人文第二回卒業)

月日の経つのは早いもので、卒業して八カ月が過ぎようとしている。私は目下就職に従事しているが、授業や教材研究の合間のひと時に今では懐しき存在になつてしまつた山口の事をよく思い出す。郷里が田舎である私は、将来は放送ディレクター志望という事で、進学は情報量の多い都会の大学へというのが希望であつた。しかし長男である事、経済面から地方大学への進学を余儀なくされた事は、第一の壁であつた。それも宿命と思

い我が身に鞭打ち頑張つた結果、晴れて念願の国立大学合格の運びとなつた。だがその大学、その所在地は正直言つて私を幻滅の底へ突き落した。交通の不便さ周囲の山々が急接近している盆地、陸の孤島、そして大学の授業の平凡さ、失恋；どれもこれもが反理想の世界であつたのだ。第二の壁である。それで新入生特有の五月病にかかる始末で、一年間のほとんどの陰鬱な日々を連続であつた。何となく大学を変えようと思つた事か。しかし、その度毎に私に一考を授け、叱咤激励をしてくれたのは、何言おう、この地できた親友であつた。恋人もできた。一喜一憂しながら、徐々に私は、山口・山大に順応していったのだ。その間接的要因ともなつたのは、山口の人の素朴さ自然を愛するゆつたりとした心である。きれいな道路や榎野川をとつてみても、その片鱗は伺える。

四年間、私に一大転機をもたらしたものが二つある。西洋から東洋への志向転換と、少林寺拳法との出会いである。前者は、高校時代の派手さ、外見的カッコ良さを求めていた反動で、じつくり落着いて、中国の学問に触れるにつれ、初めて文学の深み、面白さを知り、日本人に一番欠けているものが中国の文化には、多々ある事を知らされた。講義の際等は自分の無能・無力さを痛感させられる事がよくあつたが、岩城・福島両先生に多大の御尽力をして頂いた事は、大きな喜びであり、収獲であつた。後者は、自分の考えを人前で自信を持って言え、実行できる。指導者の在り方を、物心両面から私に教えてくれた。特に、三年時の主将の体験は、何物にも変え難い貴重なものとなり、私にも勇気と自信を与えた。しかしその後、第三の壁が立ち上がった。例の拳法部の事故である。最後の四年間の締めくくりが、こんな形で終わろうとは、ついぞ夢にも思わなかつたが、嘆いてばかりもいられないのが厳しい現状だつた。三月の卒業式の際、私は、しかと心に誓つた事を思い出す。「俺は、二人の後輩をいつまでも、この背中にしよつているんだ」と。

振り返つてみれば、幾多の壁、紆余曲折の四年間であつたが楽しい事もあつた。四年間という一時期に全国から同志が集まり、山口・山大という小さい一画で、熱き思いを語らい、触れあい、そして全国各地へ去つていった。中には一期一会の者も多々いる筈。私は山口・山大時代に人生の縮図を見た思いがした。

(福岡県立三池高校常勤講師)

人文学部研究室紹介

いま山大・山口は

中国哲学研究室

中国哲学研究室は、人文学部の前身、文理学部が発足した当初から開設されていた研究室の一つである。東洋史学や中国文学の研究室と並んで、本研究室が早くから設置された事実は、山口大学草創期に、中国研究の重要性がよく認識されていたことを示している。

開設以来、本研究室には、石黒俊逸(旧制山口高校より在職、一九六一年逝去)、湯浅幸孫(一九五〇年来任、六一年京都大学へ転任)、天野鎮雄(一九六八年任、七八年退官、七九年逝去)の各教官が在任したが、わけても、本研究室の創設に当たった石黒教授の特色ある風貌を記憶しておられる卒業生諸氏は多いことであろう。

文理学部の発足このかた、教養部との分離(一九六六年)、人文学部・理学部への改組(一九七八年)など、いくつの変遷のなかで、かつては、文理学部文学科の切り捨てや縮小をはかる動きが強く、それとともに本研究室の存続に危惧を感じざるをえなかった時期もあったことをここに記しておくのも無意味ではあるまい。

さらに、日中国交回復に先立つ一九六三年の中国学術代表団の来学や、一九七〇年前後のいわゆる学園紛争をも、研究室の小さな歴史に刻んできた間には、ま

た、学業なかばの青年が不慮の死をとげた事件もあったのである。

一九八二年までの本研究室の卒業生は六十八名(女性十九名)に達し、社会での活動分野は、高校・中学や大学・短大の教職、国家・地方公務員、各種企業・団体、マスコミ、自由業等にわたっており、多彩といつてよい。家庭のよき主婦となっている女性がいることもいうまでもない。

現在、専任教官は内山俊彦(一九六一年来任)、山田和夫(一九七八年来任、本年度は中国山東大学に留学中)の二名、本研究室出身の大塚博久教育学部教授も講義を兼担し、非常勤講師(本年度は福永光司氏)の集中講義もある。所属学生は十二名(女性二名)、小所帯だけにまとまりもよく、学生諸君には、中国化学習への意欲の高まりが感ぜられる昨今である。

(内山俊彦教授)



研究室風景

国史学研究室

糸米校舎(本館二階左端)にはじまり、後河原校舎(文科研究室一階西端から第二棟一階)へ、さらに吉田キャンパスに移つて、文理校舎(二階中央)、ついで現在の人文校舎におさまっている。キャンパス東南隅にある六階建ビルの三階の一角にあつて、ちよと重要文化財、平清水八幡宮と指呼の間にある。卒業生は、各所の研究室において巣くつた多彩な思い出を、それぞれ心の底にいだいているにちがいない。昭和五十七年三月で、その総数一八一名(うち女子六〇名)にたつた。

五十七年度の国史学生は、二年一一名、三年一一名、四年一三名、専攻科一一名、合計三十七名をかぞえる。一学年、五、六名だつたころにくらべると、倍増の員数である。うち女子学生一四名。時代別の研究会をつくり、またサークル活動に熱中する者も少なくない。学生の自己観察は、「研究室で演習をはじめ、古文書・特講などの授業が行われ、くつろいで気楽に議論したり、コーヒーを飲んだり、書物や史料とにらめっこする人の姿を見かけることもある」という。卒業生の進路は昨年度の例でみると、公務員等五、教員一、民間会社一、専攻生一、その他一、となり、教員あるいは会社員にたいし、公務員への進出が目立つ。

教官メンバーは、八木充教授(29年卒)と田中誠二助教授の二人で、古代と近世を担当している。日本史研究における専門分化が、よりいちじるしくなり、これだけでは教育指導上、不十分なため、他に中世史の木村忠助教授(教養部)、近

代史の中塚明教授(奈良女子大)が出講している。八木は、本年度、日本文化巡回セミナー講師として渡米し、また国内二大学の集中講義に出かけている。

このたび十数年ぶり、二度目の山口勤務となった重中士朗氏(28年卒・NHK副局長)の話によると、まっ先に足をはこんだところは、学生時代の下宿であつたという。ぜひ山口へ、研究室へ立寄つてくださることを、国史の卒業生の諸氏に希望する。残念ながら解体された糸米校舎を除けば、かつての研究室は、いづれも変容しながらも「歴史」を秘めて現存している。

フランス語学・フランス文学研究室

初めてお便り致します。人文学部の発足に伴ない、フランス語学・文学科が創設されました。今年、一九八二年三月に第一回卒業生として六名の男女が去つて行きました。東京、大阪、神戸、広島、山口などで活躍しています。

研究室の構成を説明しましょう。学生は四年生が七名いて、ゾラ、スタンダール、ランボオ、サン・テグジュペリ、ボーヴォワール、サルトル、ヴィヤン等についての論文を執筆中です。三年生が十名、二年生は十三名です。

スタッフは、八十年四月に赴任した井上三朗氏と末松壽の二名です。井上氏はジュリヤン・グリーンを中心に、現代小説及び自伝の諸問題の研究に取り組んでいます。授業では文学演習、文学講読、文学史、文学特殊講義を担当しています。末松は、古典文学、言語学それに文学理論を学んでいます。授業は、語学概論、語



人文学部校舎 6 階より見た構内



研究室演習風景

学演習、文学講読、作文、それに文学概論の担当です。他に非常勤として教養部の平山豊氏(講読)、宇部短期大学の末松クレール氏(会話)に来て載っています。一月には、大阪外大の原田武教授の集中講義、「ブルーストの文学」が予定されています。

全くのゼロから出発した書籍も、三年目を終えんとする現在、ざっと千冊足らずという状態にこぎつきました。不十分ながらも、研究室はまもなく一杯になりそうです。特記すべきこととしては、今年五月から月二回の割でフランス映画の上映会を開催しています。山口の文化状況を考える時、これは大変なことです。

フランス語の実践的力、フランス語に

ついての理論的考察、そして文学の研究というような、就職してもこの国では余り直接には役立たない知識がもしかしたら知性の一つの窓になるかもしれないという希望で一同頑張っています。皆様お元気で。

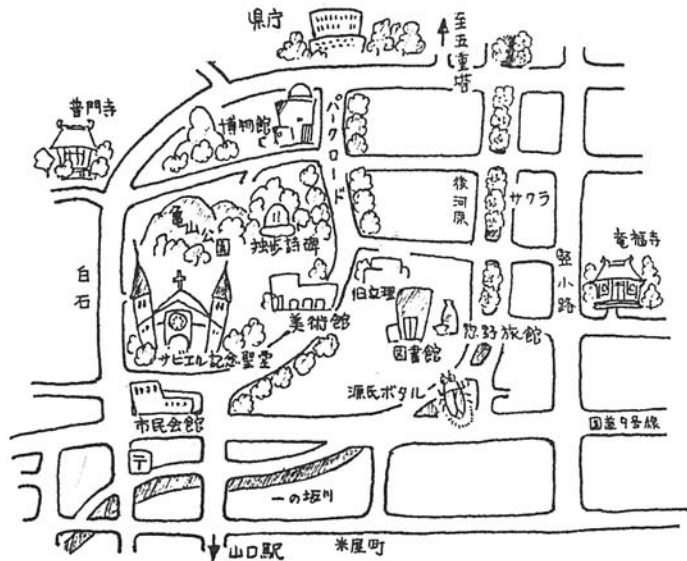
(末松壽教授)

山口点描

我々が青春の一時期を過ぎた思い出深い山口の街のいまをペンとカメラで紹介しよう。今回は主に昭和30年代の文理時代の学生に特に懐かしい一の坂川周辺をクローズアップしてみる。

ご存知のように今、後河原に山大はない。建物はほぼあのままだけれど、出入するその姿は全くちがう。きちんと身なりの整った紳士と淑女ばかり。その元文理の広場に立てられた県立図書館を抜けると一の坂川である。かつて、その流れは春の桜、初夏の源氏ボタル、そしてカジカの鳴き声とともに、帰途につく学生の疲れた心に安らぎを与えてくれたものである。今もこの川沿いの道はなぜかムードがある。学生のそぞろ歩きはぐつと減ったけれど、歩くその人の姿は相変わらず落ち着いた気持ちに包まれている。石垣のところどころについている石の階段でありると、その水もまた驚くほど清澄であった。その川沿いの道を少しおろした亀山橋の手前には昔と全く同じたずまいをみせている、いかにも古めかしい建物がある。いわずとしたコンパの名所「惣野」である。ここに思い出のある人は多くあろう。安くて大いに羽目をはずすことのできたあの「惣野」である。

一階の部屋には今も、昔の強者たちの暴れた跡が残っている。胴上げのあとと思われる足あとが大きな穴となって天井にあちこち。中年の品のよいオパチャンはこれをつまでも残しておきたいと熱っぽくおっしゃる。実際、ここはふすまか畳が少し変っているだけでほとんど昔のままである。「安く」「いごこち



よく」「落ちつく」ことを商売のモットーにし、学生の心をいつまでも大事にしてゆきたいとおっしゃる「惣野」は、平川に学生が移ってからもコンパの時期になると大変な人気のあるところである。まず週末のコンパはよほど早い時期からでない駄目ようである。これも学生の気持ちをはひとつになれる雰囲気づくりに努めておられる「惣野」の功績であろう。卒業生よ、かつて青春の炎を燃やした「惣野」は今も学生の心の中に生きつづけている。

研究室同窓会だより

社会学研究室

鴻文会の発足を社会学同窓会員一同心から喜びとしています。

さて、山大社会学同窓会は昭和五三年春に誕生し、まだ四年の若い会です。潮見先生、近沢先生を山口に迎え卒業生が集ったときに何時も同窓会設立の話が出ておりましたが仲々結成までに到らなかった。しかし、両先生の励ましと、研究室の山本先生、木下先生の御指導と御支援をいただきようやく設立にこぎつきました。現在研究室を巣立って行った者は約三〇〇余名に達しております。この仲間を結ぶために次の事業に取り組んでいます。



山大社会学同窓会報の発行年一回発行、会員の近況、社会学教室の様子を知らせ、会員相互のコミュニケーションを深め親和と発展に努めます。また、教官と会員を結ぶ絆として、最近会報を送る郵送料が嵩み台所はなかなか苦しい状態です。

同窓会員名簿の作成
会の発足と同時に第一回の同窓会員名簿を作成して配布した。会員の皆さんから大変喜ばれており、今後新しいものを数年毎に作っていく予定にしています。

社会学研究室誌の編纂
大学も三度移転し、開学当初の昭和二四年頃と今日とは大変な違いがあります。研究室と研究室を取りまく学生の生活の変遷を記録に留めたいと思ひ、現在資料の収集に当たっています。

同窓会の本部は大学の研究室に置いていますが、会員が全国各地で活躍して居る現状からそれぞれの地域で支部を結成するように勤めており、現在広島市を中心に山広会が誕生して活動をしていました。毎年同窓会の総会を山口市で開催してきましたが、昭和五七年度は山広会のお世話で広島市で盛大に開催することができました。

四年間、青春の一時を過ぎた社会学教室はわれわれの心の古里であり、古里を大切に、研究室の発展を願ひ、何程かの力になればと思う会員諸氏の気持ちと同窓会の心とし将来へ伝えて参ります。(竹田守恵・文理第一回卒業)

西洋史学研究室

毎年、西洋史学研究室ではOBの方々を

お招きしてOB会なるものを開催しています。

西洋史研究室の場合、このOB会を在学生会が計画し、主催するのです。西洋史研究室の卒業生名簿を調べるところから始め、OBの方々それぞれに往復ハガキを送り、出欠確認、会場の設定などをすべてを在学生会が行なうことになっていきます。

では、何時ごろからこのようなOB会が開かれるようになったかといいますがそれは、七、八年前にさかのぼります。当時西洋史の教官をされていた綱川先生の転任に当って、先生の教え子であるOBの方々を招いて開いたのが西洋史研究室のOB会というものの起源です。綱川先生転任の際のOB会は別としても初めの頃は、ごく小規模なものであり、県内在住の比較的近くにおられるOBの方々や、卒業されたばかりのOBの方々がほとんどでした。出席者は少しづつ増えていくようですが、今年OB十数人と研究室在学学生二十人程度、それに渡辺先生、尼川先生、教養部の古賀先生を加えて盛大にとり行なわれました。今年の場合、渡辺先生の退官が来年に迫っていますので、渡辺先生を囲む最後のOB会となりました。ですから今年には特に古いOBの方々も参加され、先生を囲んで昔話に花が咲いていました。

卒業したらそれきりというのではなく、OBとなっても研究室との関わりというものをお勧めします。(西洋史学専攻学生)

国語学・国文学研究室

国文科同窓会が発足したのは昭和四十四年。当時百五十名に満たなかった会員も、今年新たに人文学部第一回卒業生二十六名を迎え入れ、優に倍を越した。研究室を中心として行われている研究発表会は、年ごとに盛んになり、論文掲載誌「山口国文」もすでに五号を刊行して、第六号の発行も近いと聞く。

同窓生諸氏の研鑽を嘉すとともに、本会が名実ともに確かな発展を続けていることは同慶の至りである。

本会は現在県内を四地区に分け、二年度の輪番制で運営されているため、総会も二年に一度開かれている。

前回は五十六年二月、宇部市に大学の教官をお招きして行われた。出席者は二十年台卒業生五名、三十年台九名、四十年台五名、五十年台二名の計二十一名。皆がそれぞれの場で活躍していることを確かめあい、遠く外国の地にある友にも想いを馳せ、今は亡き関守先生、小野先生を偲んで懐旧談にも花咲くうち、多士済々の余興が飛び出し、楽しい一時を過ごしたのであった。

今回は、来年二月下旬で催されるようである。特に若い同窓生に、ふるって参加してもらいたい。

同窓に学んだ者が一堂に会し、年齢を越えてその絆を更に固め、生けるしるしを味う喜びをともにしたいものである。(河口 正・文理第二回卒業)

鴻文会第2回役員会(57.5.8)

昭和56年度事業報告

- 10.31 文理学部、人文学部新同窓会結成総会(鴻文会発足)。文理学部同窓生懇親会
- 11.21 第1回役員会
- 12.18 会報創刊号発行(12.8付)

昭和56年度収支決算

収入の部

科目	決算額	摘要
繰越金	90,597	文理学部旧同窓会残金(文科分) 1,104円、文理学部卒業生名簿(51年3月刊)売上残金(文科分) 72,343円、同後日売上金17,150円
会費収入	1,401,000	5,000円×280人(現金46人、振替234人)+1,000円×1人(振替)
懇親会会費収入	198,000	3,000円×66人(56.10.31)
名簿売上収入	1,800	文理学部卒業生名簿2冊
借入金収入	350,000	庚申会より(56.10.1)
雑収入	10,000	渡辺人文学長より鴻文会発足祝儀
合計	2,051,397	

※56年3月31日までに払出したもの

支出の部

科目	決算額	摘要
会議費	1,700	役員会(56.11.21)茶菓子代
印刷費	90,000	同窓会結成総会案内封筒(1,800枚)7,000円、同案内文(1,800枚)8,000円、同葉書(1,600枚)16,000円、会報(2,000部)50,000円、新入生用会則(1,000枚)9,000円
郵送費	244,320	同窓会結成総会出欠葉書40円×1,600=64,000円、同発送60円×1,549=92,940円、役員会(56.11.21)出欠葉書80円×10=800円、会報発送60円×1,443=86,580円
懇親会費	208,000	文理学部同窓生懇親会(56.10.31)料理代
借入金返却費	358,006	庚申会への借入金返却(利子含)(57.3.17)
謝金費	15,000	会報発送アルバイト1日1人2,500円(3人分×2日)
雑費	24,892	会報発送用封筒(2,000枚)5,600円、文房具3,832円、鴻文会印(ゴム印3コ、木印1コ)13,970円
次年度への繰越金	1,109,479	結成総会写真1,440円、郵便振替口座開設50円
合計	2,051,397	郵便貯金1,077,994円、現金31,485円

昭和57年5月8日監査の結果、過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監事 森田良吉 (印)
行村和男 (印)

昭和57年度事業計画

1. 会員名簿の発行(10月予定)
2. 会報の発行(10月予定)
3. 第2回役員会(5月8日)
4. 第3回役員会(名簿、会報発行後)

昭和57年度予算案

収入の部

科目	57年度予算額	56年度収入額	比較増減	摘要
繰越金	1,109,479	90,597	1,018,882	
会費収入				
卒業生	400,000	1,401,000	△1,001,000	5,000円×80
新入生	900,000			5,000円×180
合計	2,409,479			

支出の部

科目	57年度予算額	56年度支出額	比較増減	摘要
会議費	56,000	1,700	54,300	役員会2回(茶菓子代2,000円+車代26,000円(市内2,000円×10+市外3,000円×2))×2
印刷費	242,200	90,000	152,200	名簿発行用住所等確認(葉書(5,000枚)45,000円、封筒(5,000枚)20,000円、案内文(1,800枚)7,200円)名簿(30円×2,000人=60,000円、索引140,000円)会報(2,500部)70,000円
郵送費	582,080	244,320	337,760	名簿発行用住所等確認送料(40円+60円)×1,800=180,000円、名簿、会報送料200円×2,000=400,000円、役員会出欠葉書2回(80円×13=1,040円)×2=2,080円
寄付金費	50,000	0	50,000	日中学術交流奨励会
謝金費	90,000	15,000	75,000	アルバイト宛名書・2回(名簿発行用住所等確認+名簿、会費発送)(3,500円×10)×2=70,000円、幹事用謝金20,000円
雑費	16,000	24,892	△8,892	名簿、会報発送用封筒(2,000枚)7,000円、文房具2,000円、30年史購入金7,000円
予備費	1,373,199			
合計	2,409,479			

鴻文会 この一年(56.12~57.11)

56.12.18 「鴻文会会報」創刊号発行(12.8付) 57.5.8 第2回役員会:56年度事業報告、収支決算、57年度事業計画
 予算案(別途記載)承認。ほか会報の体裁、名簿の作成について検討。 5.26 山口大学日中学術交流奨励会、発起人及び設立総会
 出席(副会長大塚博久)和田敏英会長監事に。

昭和五十六年度
人文学部卒業生就職状況

昭和五十七年四月三十日現在

卒業生数	159
就職者数	142
進者数	53
大学院	3
専攻科	1
建設業	1
織維工業	3
印刷	2
化学工業	1
金属製品	1
電気機械器具	2
輸送用機械器具	4
その他	4
製	24
卸・小売	9
百貨店・スーパー	6
商事貿易	9
銀行	2
信用組合	3
金融・保険	2
運輸業	2
新聞・出版	6
ラジオ・テレビ	2
情報処理業	9
広告観光業	1
教員	29
非営利的団体	1
国家公務員	4
地方公務員	22
上記以外のもの	14
合計	128
就職率	90%

昭和五十七年度
人文学部新入生県別入学者数

(男女別)

府県名	男女	計
神奈川	1	1
長野	1	1
岐阜	1	1
静岡	1	1
愛知	2	2
三重	1	1
滋賀	2	2
大阪	2	2
合計	11	11

兵庫	1	1	1	3
奈良	1	1	1	3
和歌山	1	1	1	3
鳥取	2	1	1	4
岡山	5	3	3	11
山梨	3	5	8	16
広島	5	8	11	24
山口	3	5	8	16
香川	5	8	11	24
愛媛	1	1	1	3
計	176	119	193	488
福岡	1	1	1	3
佐賀	1	1	1	3
長崎	1	1	1	3
熊本	1	1	1	3
大分	5	5	5	15
宮崎	1	1	1	3
鹿児島	2	2	2	6
鹿兒島	1	1	1	3
計	69	69	69	207
合計	179	188	262	629

昭和五十七年度
人文学部研究室学生数

昭和五十七年十一月末現在

研究室名	2年	3年	4年	計
哲学・倫理学	9	7	7	23
中国哲学	4	4	4	12
日本思想史	7	7	7	21
美学美術史	7	7	7	21
国史学	11	10	10	31
東洋史学	11	10	10	31
西洋史学	11	10	10	31
考古学	11	10	10	31
社会学・社会心理学	11	10	10	31
社会人類学	11	10	10	31
国文学	11	10	10	31
中国語学・中国文学	11	10	10	31
英語学	11	10	10	31
英米文学	11	10	10	31
ドイツ語学・ドイツ文学	11	10	10	31
フランス語学・フランス文学	11	10	10	31
言語学	11	10	10	31
合計	174	199	175	548

通信

○添田幹事のお骨折りで立派な名簿が出来上りました。充分ご活用いただきたいと思います。なお、まだまだ住所不明の方が多くいらつしやいます。ご存知の方はどうかご一報をお願い致します。また住所等がご変更になりましたら、なるべ

く早くお知らせしたいと思ひます。○この名簿は会員全員と特別会員にお送りしました。なおこの名簿は会員の会費でまかなうことにし、無料とすることが第二回の役員会で決まりました。○五十七年十二月末までの会費の納入者は卒業生四〇九名、新入生一七〇名です。

○名簿作成に予想外の費用がかかりました。どうかまだ会費を未納の方は至急お納め下さいますようお願い致します。終身会費(五、〇〇〇円)郵便振替口座 下関〇一五九〇

加入者名 鴻文会
○山口大学の最初の企画である「山口大学二十年史」が近く刊行される予定です。購入方法等詳細については次の案内をご覧下さい。

2月中旬刊行 予約受付中

山口大学二十年史

●サイズB5版(一、四八〇頁)上製本
●ケイス入り
●領布価格 五、五〇〇円
(送料別) 五、〇〇〇円
(送料別) 五、〇〇〇円
●お申込み方法:お名前・お名前・お電話を記入の上、官製ハガキにて、お申込み下さい。
(お申込み先・お問合せ先)
山口市大手町三二四パークビル2F
大村印刷(株)山口営業所
山口大学三十年史係
(電話)〇八三九(二二一)一五六九

○「山口大学日中学术交流奨励会」に鴻文会も他の同窓会とともに加入しました。人文学部は現在中国山東大学から二人の方が学んでおられます。○鴻文会ならびに会報に通信やご意見、ご批判などをお送り下さい。今回から登場しました「私の中の山大・山口」をシリーズとしてしばらく続けたいと思ひま

編集後記

○大変遅くなりましたが、やつと会報第2号をお手もとにお届けします。今回は皆様からいただいた原稿を中心に掲載しましたので、頁数が前回より倍増致しました。今後会報はこのくらいの分量になると思ひます。原稿を送っていただきました方、心よりお礼申し上げます。○今回よりシリーズものとして「私の中の山大・山口」「いま山大・山口」をしばらくの間連載したいと思ひます。「私の中の山大・山口」に原稿をお寄せ下さった四氏の文章には、学生時代にめぐりあつた師や友との触れあい、そして山口の美しい風景を愛した数々の思い出が切々と綴られ、我々の心をあの良き時代へと誘ってくれます。○「いま山大・山口」では主として編集室を中心に、山口在住の者で、遠く山口を離れている卒業生に、山大・山口の現在を紹介しようと思ひます。今回は三研究室の先生に「研究室紹介」の原稿をいただきました。また「山口点描」は坂川周辺を探索しました。少しづつではあるが変りつつある街や学舎にそれぞれなつかしい思い出をオーバーラップさせ、それぞれにとって学生時代が何であつたか、ぜひ心の中を風景をたずねられ明日の活力とされることを祈ります。○また「研究室同窓会だより」も「研究室紹介」とともに順次掲載の予定です。どうか研究室単位の同窓会をされたところがありましたら、内容、雰囲気など(また写真も)をお知らせ下さい。(〇)